

新刊
紹介

"I love my books as drinkers
love their wine; The more I
drink, the more they seem
divine."

本書は「政界や財界の中心地でもなく、大工業都市でもない」京都の進歩性の原因について。「大都市が革新系に有利だという一般的原因のほか、京都特有の要因が他にも考えられないだろうか」との問題意識にたつて分析を進めている。そして、革新系が全投票数の六割近くを占め、しかも共産党候補が最高点で当選するなどの事実注目すれば、京都ならではの観があり、本書の視点は公式に埋没しがちな選挙調査への警告であり、評価さるべきものといえよう。

同志社大学人文科学研究所編「京都市民の政治意識と投票行動―昭和38年11月総選挙の実態調査」 京都・同志社大学、B5判三〇〇頁、非売。
本書は、同志社大学人文科学研究所政治・行政研究グループが行なった第三十回総選挙の実態調査の報告書である。
本書は、選挙の実態調査にはまれな、二〇〇頁という膨大なものであるが、単に政治意識の構造のみならず、「革新」京都の構造を諸角度から分析するデータと手掛りをも提供している。

調査結果ではつぎの点にとくに興味をひかれる。(1)投票率において、同じ商工業地域でありながら、下京区は一位、南区は四位であるが、東山区は最下位にある。そして「投票決定の時期」の投票日の二、三日「前」という浮動票の比率は、共産党候補が最高である。(2)「候補者選択の契機」では政党型が人物型をかなり上回っており、京都の近代性を示すかにみえるが、共産党候補の場合、自民党同様、人物型が比較的多く、「支持の強さ」においても「わからな

い」の回答がかなり多い。(3)政治的無関心層において意識的なそれが増加している傾向とは対照的に、「選挙争点」たとえば「物価問題」への関心は非常に高いにもかかわらず、政治意識の変化とはほとんど関連をもたない。(4)選挙にはたすマス・コミの機能は意外に大きい。

以上のような結果は、一般の傾向のみならず、京都の特殊性をも示している。しかし、同時に、従来の「革新」とか「進歩」の概念に疑問を投げかけてはいないだろうか。特殊京都的条件は別に詳論が与えられるようだが、右の疑問は重要かつ深刻であり、場合によっては、「革新」京都も疑わしくなる。(佐藤正幸)

岡本昌夫(文学部教授)著「コルリッジ評伝と研究」京都・あほうん社、A5判二八二頁、八五〇円。

S・T・コルリッジは十九世紀イギリスのロマン主義時代を代表する詩人の一人であると同時に、深遠な哲学的思索の文学批評家として英批評史上最も偉大な存在の一人である。本書はそのコルリッジに対する著者多年の研鑽から生れた一つの大

きな結実である。

本書は三部から成り、第一部は評伝、第二部はイギリス文芸批評における想像力説の伝統、第三部は雑考となっている。

第一部は単なる伝記ではなく、コールリツジの作品や書簡を通じて極めて具体的にその精神的発展が探ねられている。殊にワーズワースとの相照関係の章は興味深く、その他彼の哲学的発展、沙翁觀、周辺の人達との関係などの章においては、その人間的展開と、詩人哲學者批評家としてのコールリツジの人間像とが総合的によく捉えられている。

第二部は十六世紀から現代に至るイギリスの想像力説の展望と、その中心者としてのコールリツジを究明した力作である。凡そ文芸の創造は人間活動の最も崇高な一つであり、その根源は想像力にある。それに關して約四世紀に亘る頗しい諸説を丹念緻密公正に精査し、コールリツジの所説をもつて最高權威あるもの、現代もなおその真義の上に出ていないもの、と位置づけている。由来、イギリスの想像力説の歴史は同時に批評文学の歴史であるといつても過言

でないが、ここに引用されている多数の諸説とそれへの諸批評はまことによく照合整頓され、それは正に一つのイギリス文芸批評史の観があつて、その面からも本書は意義深く、かつ威容を呈している。

第三部はコールリツジの肖像画考、二篇の詩の鑑賞、著者外遊に際してのコールリツジの史跡探訪等の小品を集め、これまた興味深いものがある。

本書ではコールリツジの詩品への集中的研究や、E・A・ポー(米)、T・リボー(仏)、T・S・エリオット、I・A・リチャーズ等の諸説との關係論については構想の外にあつたのか、詳しく見るところが少いのを些か憾みとするが、その広範な内容と忠実な研究態度と相まって、豊富なビブリオグラフィと索引の整理等実に敬服のほかない学究的好著である。工藤好美氏、加藤竜太郎氏のさきの二著に加えてわが国コールリツジ研究の名著として英文学界に寄与するところが大きいであらうと信じて疑わない。なお、本書にはまことによく選択された珍しい挿絵が八葉挿入されていて好資料であり、また観るにたのしい。(S・K)

金山正信著(法学部教授)「物権法―総論」
東京・有斐閣、A5判三九〇頁、定価一、二〇〇円。

本書は、「物権編・総則」の一七五条から一七九条までの五カ条にかんする問題の解釈を体系的にこころみたものである。わずか五カ条の解釈に本文だけで三八一頁にも及んでいる。この頁数が示すように、この領域でのあらゆる問題が詳細にとりあげられ、問題ごとに、大審院からごく最近までの最高裁判例が豊富に検討・整理され、その動向の叙述に続いて、従来の諸学説が紹介検討されている。そして、その上にたつてふかく踏みこんだ論究がなされ、教授の自説が展開されている。教授自身が本書の「はしがき」で述べておられるように、物権総論の課題は「物権變動論」であり、その重心は「對抗問題」である。對抗問題は「登記」と「引渡」をめぐる法律關係につきるが、なかならず不動産における登記の對抗關係にある。特にこの領域は、複雑多岐にわたる法律問題が多く、実務上の必要性もきわめて大きい。だから、理論上はもちろん、実際上も、不動産登記關係を論

究することでのこの課題の焦点にせまることのできるのである。この部分に当てられた頁数は本文の七割に及んでいる。本書の構成・内容については紙幅の都合で紹介することができないが、豊富な資料に基づいて詳細な解説や議論が十分に展開されているこというまでもない。本書は単なる概説書ないしは学生用テキストブックではなく、法律専門家むきの著書である。学生にとつて、ひととおりの講義をおえ更に突っこんで勉強をするためには最良の書物である。なお、本書は、この分野で数年来みなかった労作として高く評価されていることを書き加えておきたい。

(金原光蔵)

角田豊(文学部教授)著「社会政策講義」

東京・未来社、A5判一九六頁、定価四八〇円。

労働法から社会政策畑へ移った著名学者は相当いる。古くは北岡・風早、現役にも岸本・藤田・大友・舟橋、それに同志社の角田豊教授がいる。ただ、両領域に業績があり、両方をこなせる学者は少なく、私

の知っている限りでは角田教授と京大の片岡教授ぐらいであろう。

社会政策学における労働法の位置づけについては内外の社会政策学会において、長く論争が続けられた。わが国においては二つの主要な流れがあり、その一は労働法は総資本による労働力の保全という役割をもつという立場、今、一つは労働法は労働者の階級闘争の産物であるという見解である。

角田教授の見解を要約すると「社会政策は労働力の総体としての保全・培養をもたらず政策のみを領域とし労働政策のすべてを指すものではない。したがって、それはあくまで労働力の商品性の枠内にとじこめておくものであり、資本主義的限界をもつ……」と説明している。この意味で教授の社会政策の本質にはハイマン(先験的理論主義)もなければ、マックス・アトラー

(社会主義的社会政策論)も適当せず、また風早氏の「労働者階級の主体的反省の強化によって、社会政策は資本主義制経済機構下において漸次、それとは異なる社会秩序の基礎構築をなすものと考察する」という領

域も含まれないものと考えてよい。

その意味では、教授の見解は第一の立場を支持するように思われる。がしかし更に、教授は「労働立法は本質的には労働力保全という経済的必然性に由来するものであるが社会政策の質量(性質と規模)を決定する要因は階級闘争であり、社会政策の必然性貫徹のための鍵は二重である」と説明し、法則的なものと力関係を引き離さないで、この両者を構造的連関の中で統一的に把握している。

法社会学者であり、かつ社会政策学者としての特徴がここにも明瞭にあらわれている。このような考察を基底にして、労働力政策の史的解明のみならず、更に、国家の政治的介入の著しい現時の労働問題に対して多角的な鋭い問題提起を行ない、社会政策の体系的把握とその概説が明快な論理をもって運ばれている。

教授の広汎な学識、豊かな人間性と社会的正義、タフな行動力に学界の期待するところは大きい。

(中条)